

丁寧体を基調とする自然談話における普通体使用 — 判断を表す形式とのかかわりをめぐって —

福島悦子 上原 聡
東北大学
{efuku, uehara}@insc.tohoku.ac.jp

1. はじめに

丁寧体での会話に普通体が混用されることは既に指摘されている。また、一つの会話内で、同一の話し手が同一の聞き手に対して異なる待遇度を表す丁寧体と普通体を混用する現象は、実際の自然談話でしばしば見られる。その要因については、スピーチレベルシフトや丁寧体と普通体という文体と丁寧さの観点などからの分析がなされている。前者では、レベルシフトの要因・機能として、心理的距離の調節、談話の展開標識、発話の機能（宇佐美 1995、三牧 1993）などがあげられている。後者では、丁寧体に普通体が混用される場合の条件について、〈話し手〉〈聞き手〉〈中立〉の領域という概念を用いて⁽¹⁾、発話がどの領域に属するかという観点から説明したもの（鈴木 1997）などがある。

しかし、実際の自然談話を分析してみると、上記では説明のできない普通体の用例がある。「かもしれない」という判断を表す形式がそれである。そこで、本研究では丁寧体を基調とする自然談話における普通体使用を、発話の談話上の機能と発話内容という観点から分析・考察する。さらに発話の談話上の機能と発話内容による相互作用という観点から普通体使用の条件が説明できることを指摘する。

2. 分析の方法

2. 1. データ

データとして「日本語教育学会平成 10 年度 第 5 回研究集会」において収録した、計 60 分におよぶ談話資料を文字化したものを用いる。資料は初対面の 30 代から 50 代の女性 4 人の自然談話で、標準語での会話である。内容は、研究集会の課題についての話し合い、昼休みに食事をしながらの自由会話である。

2. 2. 対象・方法

資料中の以下の発話は、そこで文が終止しているものではなかったり、文体とは別の要素を加えて分析する必要があると考えられるものであったりするので、今回の分析の対象から外した。

- 1) 言いさし：文末が「が」「けど」「し」「て」などである場合
 - 2) 疑問を表すもの：文末に「か」が付加したり、上昇調のイントネーションを伴う場合
 - 3) 普通体かどうか、認定ができないものや定型表現：
文末が名詞・副詞などである場合、挨拶など
 - 4) あいづちないしはあいづちとの区別が困難なもの：「そう」の類
 - 5) その他：命令・指示を表す「～てください」、「～でしょう」、「～ましょう」の類
- 以下、上記の手続きを経て得たデータを、談話分析の手法を用いて分析・考察する。

3. 分析・考察

3. 1. 丁寧体と普通体の使用状況

まず、初対面の会話で丁寧体、普通体がどのように出現するかを数量的に示す。

	終助詞なし	終助詞付き	計
丁寧体	60 例	176 例	236 例
普通体	49 例	18 例	67 例

表からわかるように、丁寧体が多用されている。これは、初対面での会話が丁寧体を基調として行われることを裏付けている。

次に、普通体と丁寧体では、終助詞なしと終助詞付きの用例数の分布が対照的であることがわかる。このことは、丁寧体・普通体という文体と終助詞のあるなしの形式は、関連を持ちながらもそれぞれ独立した機能を持ち得るという指摘（福島・上原 1999）や、両者の組み合わせが待遇のレベルに関わっているという指摘（鈴木 1999）に関連してい

と考えられる。

3. 2. 普通体の用法

ここでは、データに見られた普通体の用例を終助詞が付加する場合と付加しない場合に分け、それぞれを近似の用法ごとにまとめて、以下に示す。

3. 2. 1. 終助詞が付加しない場合

【独り言・回想の類】

- (1) A あー、→//寒い。⁽²⁾
B あー、→//寒い。
A ほんとにさ//むいですよーねー。↓
B ジャケット持ってくればよかったー。
(2) A で、ずうっと文通してたんです。で、そばに行ってもし失礼だといけない。で、髪の形とか、そうみたいだなあとか思って、しばらくこう、立ってたんですよ。→前、//数分だけど。そうしたらパット。そうだ。//ほーんとに、
B {笑い} {笑い}

【半疑問の類】

- (3) A [だから]あめ、あめと、あめと、あめっていう、んで//いんですか。↑
B うーん。→
A わかんないけど、//なんか[そ] ちょっと違う。うん。↓
B ちょっと上げてもいいかもしれない。

【話し手の知っている情報・事実、話し手の感覚・感想・考え・判断・経験・行動等の表明・伝達（質問に対する返答も含む）】

- (4) A でもわたしもよく言われました。あのなんか、昼寝したら兄にねぶたねぶたとかって言われて{笑い}ひどいです//よね。→
B それはひどい。{笑い} [...大いに抗議して] {笑い}
(5) A 語尾に、関西の、関西アクセントが残ってますね。→
B あ、→そう、かもしれない。それとあの一、でも[u]は[w]なんですよー、→
(6) A 使い分けやっていると。ま、うちに帰っては、違うと思いますけどね、↑
B もち//ろん。
A うーん。→
A だから、リラックスできてしゃべれる場はうちしかないという、日本語教師の宿命かもしれない。{笑い}
(7) A あの、自分の、思ってることを答えてくれないとー、いやだから、いや、そういうつもりじゃなくてこういうつもりで言ってるんだっていうことを言った方(ほう)が手っ取り早いかなっていう感じだったんですね。→ {笑い}//でも、それは確かににはたから聞くと
B {笑い}
A かなりストレートにいやだって言ってるように聞こえたかもしれない。{笑い}
(8) A 写りたくないって、// [うっかり] おっしやってたんでー、↓
B 言われたでしょ。→ {笑い} すごく//はっきり言われた。
C うん。→ そう、→
D もういらっしゃらないのでは//[っていう] 話を...
うーん。↓ あ、→ それ、それが写ってるんですねー。↑

【素材表現】

- (9) A うーん、なんか、ゆっくりとゆうよりはー、//はつきりと最後までものを
B はつきりと...→
A 言い切る//{笑い}
B そう、↓ そう、→ そう。→
B 文法的すぎる。//むにやむにやって//言わない。
A あの一、 ことが、

3. 2. 2. 終助詞が付加する場合

【独り言・回想の類】

- (10) A 冷房、切れるんですか。ー
? [...]
A 切//るか、切るか、つけるか、どっちかだわ。
B [ぜんかん]

- (11) A でね、え、何寺(なにでら)だったかなにで [ら] で、んで、はい、↓ 15 分前にここへ来て下さい。 たったったったまわって、で、清水れ、でらへ行った時なんかね、こうやってずうっとまわってて、は、15 分後(ご)に、また門(もん)に行かなければって、ひゅいと見たらね、→ そしてこう[やって]ねー、→ 誰かに、アメリカ人の人だったんだけど、こうやって下 [見て...] なんか 書いてるのね。→

【自問の類】

- (12) A じゃ、仙台の人になって... {笑い}
B うーん。→ とうかな。→ あの子どもの時とか若い時に行くの、と、また違いますよね。→
(13) A あ、あの、あっちの、日本海側通って来るか、//夜 [か] 出で、来ると、一晩で。
B あ、→ そうすれば結構あれかも
し [...] そうですね。→ そうかもしれない。//だから、なんていうの、

【話し手の知っている情報・事実、話し手の感覚・感想・考え・判断・経験・行動等の表明・伝達】

- (14) A バスの。アメリカか、から帰って来てすぐにね、どうしてもあれに乗りうって言っ、乗ったんですよ。→ {笑い} // そうして、あと、全然、
B {笑い}
A どこ行ったか 憶えてないの。→

3. 3. 普通体使用の条件

3. 2 で示した用法のうち、【素材表現】は、そもそも文末表現というより、話し手が言いたいことの内容を説明する言葉を選んでいる（概念化している）ものであり、他の用法とは区別して扱うべきものである。次に、【独り言・回想の類】【半疑問の類】【自問の類】は、宇佐美 1995 で指摘された「独り言・自問をする時」「確認のための質問、あるいは、答えをする時」に当たると考えられる。また、【話し手の知っている情報・事実、話し手の感覚・感想・考え・判断・経験・行動等の表明・伝達】の用例のうち、(4) のようなものは宇佐美の「心理的距離の短縮」、終助詞が付加した (14) のようなものについては、「当該発話外の要因のうち、相手の年齢」、本データでは年齢が上の（会話時においては上と思われる）2 名の発話で見られる、というものに当たると考えられる。

問題は【話し手の知っている情報・事実、話し手の感覚・感想・考え・判断・経験・行動等の表明・伝達】の用例のうち、(5)、(6)、(7) のような、話し手の判断を表す「かもしれない」という形式における普通体使用の存在である。これらは、宇佐美の指摘した普通体使用（正確には普通体へのレベルシフト）が起こる条件には当たらない。また、丁寧体に普通体が混用される場合の条件について、宇佐美とは別の観点、すなわち、＜話し手＞＜聞き手＞＜中立＞の領域という概念を用いて、発話がどの領域に属するかという観点から説明した鈴木 1997 は、「普通体の文末表現が用いられるのは、＜話し手の領域＞＜中立の領域＞について述べている部分に限られており」³⁾、「謝辞・質問・依頼など聞き手を目当てとした発話は、すべて丁寧体を維持している」と指摘している。しかし、(7) のような用例は、「はたの人」すなわち「聞き手たち」に関する内容を述べているにもかかわらず、普通体が用いられている。これを、どう説明したらいいのか。

実際、(6)(7) のような発話で丁寧体「かもしれません」を用いた場合、前後の文脈をよく考えれば考えるほど、不適切な感じを受ける。そこで個々の事例（用例数：8 例）を分析し、不適切になる理由として、次のような考察が得られた。丁寧体を用いた場合、それを用いることで相手との距離を意識していることが明らかなのかかわらず、自分の判断を言い切って（押しつけて）しまう感じを相手に与え、それが逆に、相手への配慮を欠くことになるからである。相手（との距離）を意識していないように、いわば相手に届かなくてもかまわない独り言であるかのように言うことで、相手への押しつけを避けることができるわけで、そこに、相手の質問に答えるときなど、自分の判断を求められている状況で独り言には必須の普通体が用いられる理由があると考えられる。

普通体「かもしれない」に終助詞を付加した形式を用いた場合は、どうであろうか。終助詞を付加することは聞き手への積極的な働きかけを意味し（福島 1999、他）、もはや独り言と解釈される余地がなくなる。その場合、普通体を用いながら相手に働きかけるわけで、むしろなれなれしい、ぞんざいな印象を与えることになり、初対面の相手に対してなされる発話としては、不適切となる。本データ中に、普通体「かもしれない」に終助詞が付加した形式が見られなかったことも、それを裏付けている。一方、丁寧体「かもしれません」／「かもしれないです」に終助詞「ね」「よ」を付加した用例は 5 例あった。丁寧体に終助詞を付加することは、聞き手へ話し手の判断を押しつけて終わるのではなく、

相手への配慮を示すことになり、不適切とはならないと考えられる。

「かもしれない」のような判断を表す形式に関しては、独り言であるかのように述べる
ことが聞き手への配慮（丁寧さ）を示すことになるのである。話し手の判断を述べる際、
「かもしれない」という概言（寺村 1984:58）の表現を使うこと自体、相手に対する配慮
があるようにも思えるが、それでも相手を意識した形で（相手に向かって）言い切るの
では丁寧さに欠けることになるのである。以上のことから、普通体使用の条件の一つとして、
ここで述べてきたような意味での普通体使用があることを加える必要があると考えられ
る。

4. 終わりに

本研究では、丁寧体を基調とする自然談話をデータとして用い、丁寧体に混用される普
通体使用の条件を考察した。考察に際しては、発話の談話上の機能（宇佐美 1995）、また、
発話がく話し手・聞き手・中立の領域>のどれに属するか（鈴木 1997）という発話内容
の観点から分析したものと比較を行った。

その結果、丁寧体を基調とした会話における普通体の使用に関して、両者ともかなりの
説明力を持つが、中には説明の及ばない用例もあることがわかった。それらの普通体の用
例の分析を通して、「かもしれない」という話者の判断を聞き手に伝える形式の場合、普
通体を用いることが必ずしも不丁寧になるわけではなく、むしろ相手に向かって言ってい
ない形式をとることで判断を押しつけず待遇上適切になるということが分かった。丁寧体
が要求される、聞き手に伝達すべき判断を表す内容の発話に、独り言という談話上の機能
が援用されることによって普通体の使用が可能となるわけで、いわば、発話内容による要
因と談話機能との相互作用という上位レベルにおける機能というべきものである。

なお、話し手の判断を表す表現形式には「かもしれない」のほかにも近似の機能を有す
る形式があるが、それらの場合の詳細な分析については今後あらためて論じることとする。
また今後、データの量、質的な偏り（本データでは 30 代から 50 代の女性の発話に限られ
ている）などの問題についても検討していく予定である。

注

- (1) 本稿では特にふれなかったが、く話し手・聞き手・中立の領域>に関しては、神尾 1990
で提唱された「話し手または聞き手の情報内容へのかかわり」、また「情報と丁寧さ
との関係」との関連(相違)についても、考える必要がある。
- (2) 用例で使用した各記号は、以下の意味を表す。
→、↑、↓：文末の平板、上昇、下降イントネーションを表す。
//：前の発話が終わる前に次の発話が始まる場合の後の発話が始まる位置を表す。
{ }：「笑い」等、発話以外の要素を表す。
[]：当該発話が明確に聞き取れないものであることを表す。
- (3) 鈴木は「話し手自身に関する事柄の中でも、普通体に替えることのできる部分は限ら
れている」とも述べている。

参考文献

- [1] 宇佐美まゆみ 1995. 「談話レベルから見た敬語使用—スピーチレベルシフト生起の条
件と機能」, 『学苑』(昭和女子大学近代文化研究所), 第 662 号: 27-42.
- [2] 神尾昭雄 1990. 『情報のなわ張り理論』, 大修館書店
- [3] 鈴木雅恵 1999. 「日本語母語話者のスピーチレベルシフトについて—親疎関係を中
心に—」, 『平成 11 年度 日本語教育学会秋季大会 予稿集』(日本語教育学会),
57-62
- [4] 鈴木睦 1997. 「日本語教育における丁寧体世界と普通体世界」, 『視点と言語行動』,
くろしお出版
- [5] 寺村秀夫 1984. 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』, くろしお出版
- [6] 福島悦子, 上原聡 1999. 「会話における裸の文末形式の用法」, 『平成 11 年度
日本語教育学会秋季大会 予稿集』(日本語教育学会), 111-116
- [7] 三牧陽子 1993. 「談話の展開標識としての待遇レベル・シフト」, 『大阪教育大学
紀要 第 I 部門』(大阪教育大学), 第 42 巻 第 1 号: 39-51